

発掘調査の概要

興福寺中金堂院回廊東南の調査(平城第347次)

興福寺の主要伽藍を対象とした復元整備計画にもとづき、これまで中金堂院の中門(1998年度)、回廊東北部・中金堂前庭部(1999年度)、中金堂(2000・2001年度)の発掘調査をおこなってきました。今回は回廊東南部を発掘しています。調査面積は981㎡、2002年7月1日から調査を開始しました。この調査により回廊の全容が明らかになりました。

東面回廊は全長約65m、中門を含む南面回廊の全長は約84mあります。今回の調査で検出したのは東面回廊南半の桁行8間分、南面回廊東半の桁行6間分です。梁行は東面、南面回廊とも2間で回廊基壇の幅は10.74mです。柱の礎石はほとんど残っていませんでしたが、礎石の抜取穴によって柱の位置を確認できました。回廊は連子窓が中央に通り、その両側に吹き放しの廊下がある複廊の構造であったことがわかります。

東面回廊西側と南面回廊北側では基壇側面を飾る外装と雨落溝を検出しました。凝灰岩製の地覆石とその上にのせる羽目石の下端部が残っており、全体は壇正積基壇であったと考えます。雨落溝は川原石を2列に並べて底石とし、側石を立てています。溝の内庭側には川原石を敷き詰めた幅90cmの石敷がありました。

今回の調査区で東面回廊の最も北の柱間にあたる場所に、内庭側に下りる階段の痕跡を検出しました。階段北側の地覆石があり、雨落溝は階段の出にそって西に張り出しています。この階段の存在によ

ってここに門が開くことを推定できました。階段の幅は約4.1m(奈良時代の尺で14尺)、門の柱間も14尺であったことがわかります。

門は東面回廊の中央より一間南に位置し、これを境に北と南では、桁行の柱間寸法が異なっています。これは最初に門の位置を決めて、門を基準に回廊を北と南に分けて、必要な間数で割り振るという設計順序の結果であろうと考えます。さらに門の中心線を東西に伸ばすと東金堂と西金堂の中心と一致します。東西の金堂は中金堂院より遅れて造営されていますから、この両金堂は門から延びる軸線を基準に設計されたことがわかります。つまり門の位置は回廊を設計する基準であるとともに、周辺の伽藍を設計する際にも基準となっていたと考えられます。

今後は回廊基壇の時期や構造、回廊内側の内庭部分の状況を把握することを中心に、調査を継続します。(平城宮跡発掘調査部 今井晃樹)



調査区全景(西から)